

『現代社会の理論』 第三章・第四章

第三章 南の貧困／北の貧困

【限界の転移・遠隔化／不可視化の機制】

「大量採取→大量生産→大量消費→大量廃棄」

両端の項を情報化／消費化社会の「外部」の諸社会・諸地域に転嫁（＝遠隔化・不可視化）することを通して存立

①大量消費社会の「外部」諸地域も無理矢理引き込む汚染形態

—生産・消費の大量化による廃棄物濃度が危険値域に、微量でもグローバルに危険な帰結をもたらす新しい物質の合成

②大量消費社会内部の環境・公害規制を逃れて、廃棄物処理、汚染を発生する工程・産業の外部移転。＝「公害輸出」

←「ダブルスタンダード」：先進国(北)の公害基準に反していても途上国(南)の緩い基準に反していなければ問題なし

⇒たとえ危害が生じるものでも何でも輸出できてしまう

【「豊かな社会」がつくりだす飢え】

「豊かな社会」の消費水準によって作り出される「世界の半分の飢え」

—分配の問題

- ・ 必須食料品の家畜飼料化・嗜好品の素材化
- ・ 基本食料の生産にあてられていた土地の収奪、輸出商品への作物転換
自国の必要性に応じるのではなく、北側の市場の需要に応じて生産する

【「人口問題」の構造】

南側の貧困の原因＝人口過剰？

人口過剰は致し方ないこと

—子供を多くすることで働き手を得る。また、社会保障費を得る。

←・ 共同体の解体 or 不安定化、個人や家族の生活が不安定化

・ 共同体による支えを代補する市民社会的システムが未成熟、

⇒「南の人口問題」＝構造的に過度的な局面の一契機

【貧困というコンセプト、二重の剥奪】

金銭を必要とする生活の形式の中で、金銭を持たないこと＝貧困

—「貨幣からの疎外」の前に「貨幣への疎外」がある

c.f. 輸出作物に転換させられることで、商品作物によって所得は増大せざるをえない

すると、以前より貧しい食物しか入手できなくなっても統計上、所得は向上したことになる

⇒貨幣を必要としない世界の「貧困」を語る＝意味のない尺度

【「北の貧困」。強いられた富裕】

情報消費社会のシステムは、高度の商品化された物資・サービスに依存することを社会の「正常な」成員の条件とする。

⇒システムが絶対的に必要な水準を上げる

システムの設定した必要の水準と充足の水準の落差＝「北の貧困」

システムの内部に生成されながら外部化される

福祉—システムの矛盾を補欠するもの

【情報化／消費化社会と「外部」】

現代社会における開発・発展の無限空間—資源、環境的な限界が生じる c.f. 前章

—原的な解体と剥奪

北の貧困—原的な解体と剥奪、貨幣的必要性への絶対的従属（サービス、貨幣に依存しないでは生きられない）

しかし、システムはこのような必要性には無関心

—南の貧困と同一の論理

第四章 情報化／消費化社会の転回

序【それでも最も魅力的な社会？】

冷戦の終結は軍事力の優位による勝利でなく「自由世界の」の情報と消費の水準と魅力性による勝利

→自由を根本理念としないような社会に、われわれは魅力を感じない

〈自由な社会〉という理念をシステムの原理として手放すことなく、環境の限界／資源の限界。

南の貧困／北の貧困をどのような仕方で乗り越えられるか？

→魅力あるものであることの根拠、不可避の未来であることの根拠、現在あるような情報化／

消費化社会のシステムの原理との位相差の切開

【消費のコンセプトの二つの位相】

バタイユの消費社会論における「消費 consumption」

ボードリヤール以降の消費社会論における「消費 consommation」

Consumation: 〈充溢し燃焼しきる消尽〉＝〈消費〉＝消費のコンセプトの「原義」、効用に回収されることのない生命の充溢と燃焼を解き放つ社会の経済

Consumation: 〈商品の購買による消費〉＝「消費」＝消費のコンセプトの「転義」、商品の大量の消費を前提とする社会の形態

消費社会のコンセプトの「転義」←商品の大量の生産を要請・前提とする

⇒〈生産に対する消費の本原性〉という消費社会の理論の本義が転倒

【消費の2つのコンセプトと「限界問題」】

〈消費社会〉

〈消費〉：他の何もの手段でもなく、それ自体として生の喜びであるもの

→大量の資源の採取や自然の解体も、他社会からの収奪も必要としない

「消費社会」

〈消費〉のコンセプトを軸足として、「消費社会」が転回する必要がある

→〈消費〉を原義において豊かにする「方法としての消費社会」の構想

【無限空間の再定位．離陸と着陸】

二つの批判

①市場での商品消費需要を、商品化される必要のない消費（＝〈消費〉）におきかえると、繁栄効果を支える消費市場の無限空間は失われてしまうのではないか？

②方法としてでも「消費社会」を容認すれば、商品の大量消費の社会なのだから、大量の資源を損耗し増大する廃棄物によって環境を汚染し、他社会を収奪しつづけるのではないか？

「消費社会」：「必要の大地」からの離陸による「需要の無限空間」

「方法としての消費社会」：〈人間の生きることの喜び〉という原義的なものの方に着地させる

市場システムの永續する活力を保証する前提＝需要の空間の無限性

→〈人間の生きることの喜び〉という原義的なものは、「必要」にさえも先立ち限度もこえて、限りなく自由な形態をとることができるもの

→「必要」の地平でなく、〈生きることの喜び〉という地平への着地

→社会の活力の運動する空間の開放性を有限なもの内部に閉ざすことはない
無限空間へ

【「ココア・パフ」】

ココア・パフはそのものの栄養価ではなく、商品に付与された記号を求めて我々は消費する

→情報化／消費化社会のメカニズムが、必ずしも原理として不可避に資源収奪的・他民族収奪的なものである必要はない

新しい需要を創出するには・・・

- ・肉食化，資源凝縮的
- ・イメージ化，情報凝縮的

—現代の市場システムの要請に応える，代替的なもの

一貫した社会的・政治的・経済的・技術論的な意志と目標をもった政策が行われれば、自由市場システムでも自然収奪的・他社会収奪的でない仕方の情報化／消費化社会を永續することは可能

【情報化と「外部問題」．方法としての情報化】

情報の作用（機能）

① 認識情報：認知情報，知識としての情報

「現代社会」は，人々の生の客観的な関係は全地球的なものに拡大している

⇒人々の主観的な視界の直接性は限定されている

→関係／視界のギャップを埋めることは，情報メディアを媒介

② 公道情報：指令情報，プログラムとしての情報

市場システムを前提とする以上，デザイン情報の価値に対する価値と考え方を根本から変える必要がある

外部収奪的／非収奪的なデザイン情報に対して，市場経済的な正負のインセンティブを与える

③ 美としての情報：充足情報，歓びとしての情報

【情報のコンセプトの2つの位相】

〈美としての情報〉

情報社会論：脱産業社会論的一産業主義的な社会経済の彼方を見渡す

高度産業社会論的一産業社会の内部で情報技術について論じる

一両者は矛盾するものではないが，ズレがある。これを明示化すべし

情報：「物質」の対概念，あらゆる現象のカテゴリー

〈みえないもの〉・〈みえにくいもの〉を〈みえるもの〉として経験させる

モノとして存在しないため測定・交換・換算できないため目に見えない全てのものに対する視力が必要

⇒情報というコンセプトの可能性の中心でありながら，情報というコンセプトを超えることが必要

→2つの位相

【〈単純な至福〉．離陸と着陸】

消費化社会の思想とシステムが未来へ向けて可能性のあることの根拠

→生産の自己目的化という「産業主義的な狂気」からの脱出

「物質主義」的、外部収奪的であるほかない価値観と幸福イメージからの脱出

消費のコンセプトの徹底 → 〈生の直接的な充溢と歓喜〉

情報のコンセプトの徹底 →マテリアルな消費に依存しない知と感受性と魂の深度の空間の広がり

バタイユ：〈消費〉の観念を肯定的に転回

→ 〈消費の極限〉：他の何ものの手段でもなく，測定・換算されない直接的な生の歓び

→大仕掛けな快樂や幸福の装置を必要としない．自然や他者からの収

奪を必要としない

情報と消費の社会は，多くの外部を収奪・解体する必要はない

自然と他者の存在だけを不可欠のものとしていることを見出すはず

結【情報化／消費化社会の転回】

現代の情報化／消費化社会：人間の欲望と感受能力の原的な自由と可塑性を根拠として持続する

自然収奪的・他者収奪的でない生存の美学の方向に、欲望と感受能力を転回することも可能なはず

→手段主義的な貧困から自由な仕方で、情報化のコンセプトを転回+マテリアル収奪的な幸福イメージから自由な仕方で、消費のコンセプトの転回

⇒どのように自然解体的でも他者収奪的でもないような仕方で、直接的なものの歓喜の自由であるような世界を成す第一歩を踏み出せるはず